

生徒指導の3機能を生かした総合的な探究の実践についての一考察

A Study on the Practice of Comprehensive Research Utilizing the Three Functions of Student Guidance

三 和 聖 徳

Shotoku MIWA

弘前中央高等学校

Hirosaki Chuo High School

要 旨

本稿は、学校経営の中に生徒指導の視点が位置づけられているかについて、複数の教員が関わる総合的な探究の時間に焦点化して考察することを通して、その課題等を明らかにし、今後の本校にとっての生徒指導の在り方について探るものである。考察に際して生徒指導の3機能「生徒に自己存在感を与えること」「共感的な人間関係を育成すること」「自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること」に照らし合わせた。総合的な探究の時間からは本校の教育活動が生徒の自己実現や自己決定の場面となり得ていることがわかり、また指導における教員の共通理解が図られていることもわかった。一方共感的な人間関係の育成についてはまだまだ十分ではないという課題も浮き彫りになった。今後は協働的な学びの場を構築し、生徒の人間形成を促すためにはどうすべきかについての検討・工夫が必要であると考えられる。

キーワード: 生徒指導の3機能, 自己存在感, 共感的な人間関係, 自己決定, 総合的な探究の時間

1 はじめに

次期学習指導要領が高等学校では令和4年度から年次進行で実施される。文部科学省(2018)の学習指導要領では、主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)の視点を取り入れた学習課程の改善が示されている。それは生徒個々に応じた主体的・対話的で深い学びを実現していくために、生徒理解の深化を図る生徒指導の基盤や、教職員と生徒、あるいは生徒相互の信頼関係や人間づくり、児童生徒の主体的選択・決定を促す指導の充実だと考えられる。

文部科学省(2011)の「生徒指導提要」によると、生徒指導とは、

一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のこと

とある。これは学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つものである。このことから、

生徒指導が、教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、その一層の充実を図っていくことが必要である。

また学習指導における生徒指導の側面として、各教科等の学習において、一人一人の生徒がそのねらいの達成に向けて意欲的に学習に取り組めるよう、一人一人を生かした創意工夫ある指導を行うことが挙げられ、それは本来の各教科等のねらいの達成や進路の保障につながり、社会的な自己実現や自己指導能力の育成にもつながるものである。そしてそのための指導に際しては、

生徒に自己存在感を与えること
共感的な人間関係を育成すること
自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること

の3つの視点に留意することが必要であり、このような3つの機能を生かした授業をはじめとした指導が生徒指導の中核となる。

生徒一人一人が自己存在感を持ち、共感的な人間関係を育み、自己決定の場を豊かに持ち、自己実現を図っていける望ましい人間関係づくりは極めて重要なことである。そのため教員は生徒一人一人の良さと興味関心を生かした指導、生徒が互いの考えを交流し、互いの良さに学び合う場を工夫した指導、主体的に学ぶことができるよう課題の設定や学び方について自ら選択する場を工夫した指導など、様々な工夫をすることが求められる。このようなことから、学校経営の中に生徒指導の視点が位置づけられた上で個々の教員の指導が行われてゆかなければならず、教育機能としての生徒指導は、教育課程の内外の全領域において行われなければならない。しかし現状では具体的な指導として各教科の指導は教科担任の指導、生徒指導は個々の担任、或いは各学年、生徒指導部の指導というようにそれぞれに行われる傾向が強い。よってこれからは生徒指導を進めるにあたっては、全教職員の共通理解を図り、学校としての協体制・指導体制の構築は不可欠である。そこで今回は本校の複数の教員が関わる総合的な探究の時間に焦点化して考察することを通して、教育課程全体で行う生徒指導の在り方についての課題等を明らかにし、今後の本校にとってより良い生徒指導の在り方を探る。また対象学年を通年で2度の発表活動がある2学年とし、総合的な探究の時間について生徒指導の3機能に照らし合わせることで以下の2点を考察するものとする。

- (1) 総合的な探究の時間における教育活動が適切になされ、生徒の活動が、生徒に自己存在感を与え、生徒同士の共感的な人間関係を育成し、様々な自己決定の場となっているか。またその中の課題は何か。
- (2) 教員の指導に共通理解が見られるか。またその中の課題はあるか。

2 弘前中央高等学校の取り組み

(1) 令和2年度の総合的な探究の時間の全体計画より

本校では、総合的な探究の時間について、全体計画を立て、目標、育てようとする資質能力及び態度、内容、指導体制を以下のように定めている。

ア 「総合的な探究の時間」の目標

- ①地域や社会に目を向け、得られた情報や知識を横断的に総合し、協働することにより理解を深める力を育む。

- ②自らの疑問から課題設定をし、仮説を立て、調査研究を行い実証する姿勢を育む。

- ③興味関心から学問や職業について研究し、自らの在り方生き方を考え、持続可能な社会の実現に貢献する態度を育む。

探究とは、物事の本質を自己のかかわりで探り見極めようとする一連の知的営みであることから、生徒自ら問いを立ててこそ、学びの主体となる。また、生徒自身がテーマを選んだ時、そこにはそれまでの生き方や在り方が関連している。よって探究活動では予定調和は不要であり、生徒自身で語る経験や問いを磨き育てる時間が大切である。

イ 育てようとする資質や能力及び態度

- ①発見力…さまざまな事象から疑問や課題を見つけ、働きかける力
- ②探究力…疑問や課題から調査・実験の実施を通じて深く考え探る力
- ③実行力…自らの思考を実現するために手段を講じて行動する力
- ④発信力…自らの考えを広く発表する力
- ⑤協働力…自らの役割を理解し、目的の達成のために他者と調和する力
- ⑥創造力…学びや経験を通じて新しい価値観を創り上げる力
- ⑦傾聴力…他者の意見や考えを受け止め、受け入れる力
- ⑧自己管理能力…自分の心や身体をコントロールし向上させる力

これは本校の校訓〈自律・誠実・進取〉をもとに育成したい8つの力について具体的に示したものである。

ウ 内容

- ①地域の課題について他と協働して調べ、その結果をまとめ発表する。また、その内容を共有し、課題を解決するための方策について検討し発表する。
- ②地域の課題について研究した結果を踏まえ、進路講演会、大学模擬講義、本校OBやその他外部講師等による講話や、インターネット等を活用し、学問等について探究し主体的に課題を設定する。
- ③社会の課題と自分の「探究」した内容を関連させ、グローバルな視点で調査・研究し、報告・発表する。また、他者の発表から新たな視点でそれまでの「探究」を見直し、その結果をレポートにまとめる。
本校の探究活動のコンセプトとして、学びたいことを模索する中で、地域＝フィールドに出るということ、目的は地域の活性化ではなく、生徒個々の行動や考え方の変容を促すものである。また、一人一人が自ら問

表1 令和2年度 総合的な探究の時間 全体計画

<p>関連法規</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本国憲法 ・教育基本法 ・学校教育法 ・学習指導要領 	<p>「総合的な探究の時間」の名称</p> <p>セルフデザイン</p> <p>学校教育目標(育成したい生徒像)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自律の精神で自己の成長を図る生徒の育成 2 誠実、謙虚が身についた品性ある生徒の育成 3 進取の気象で高い目標に挑戦する生徒の育成 <p>「総合的な探究の時間」の目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 地域や社会に目を向け、得られた情報や知識を横断的に総合し、協働することにより理解を深める力を育む。 2 自らの疑問から課題設定をし、仮説を立て、調査研究を行い実証する姿勢を育む。 3 興味関心から学問や職業について研究し、自らの在り方生き方を考え、持続可能な社会の実現に貢献する態度を育む。 <p>育てようとする資質や能力及び態度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 発見力…さまざまな事象から疑問や課題を見つけ、働きかける力 2 探究力…疑問や課題から調査・実験の実施を通じて深く考え探る力 3 実行力…自らの思考を実現するために手段を講じて行動する力 4 発信力…自らの考えを広く発表する力 5 協働力…自らの役割を理解し、目的の達成のために他者と調和する力 6 創造力…学びや経験を通じて新しい価値観を創り上げる力 7 傾聴力…他者の意見や考えを受け止め、受け入れる力 8 自己管理能力…自らの心や身体をコントロールし向上させる力 	<p>青森県教育委員会</p> <p>学校教育指導の方針と重点</p> <p>【方針】 郷土に誇りを持ち、多様性を尊重し、創造力豊かで新しい時代を主体的に切り拓く生徒の育成</p> <p>【重点】 1 キャリア教育の充実 現在及び将来の生き方を考える指導 2 国際化に対応する教育の推進 郷土に対する愛着と誇りを涵養する教育の推進</p> <p>生徒の実態</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 殆どの生徒が国公立大学への進学を希望している。 2 規範意識は高いが、人間関係の構築力が弱い。 <p>保護者・地域の願い</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 充実した学校生活を送ってほしい。 2 将来を見据えた進路実現を図ってほしい。 <p>関係機関等との連携</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 大学・研究機関等との連携 2 地域の企業、施設等との連携 3 保護者や地域の職業人との連携 	
各学年の目標・探究課題			
	1学年	2学年	3学年
<p>目標</p> <p>主体的に地域の課題を考えることにより、地域に対する理解を深め、地域に貢献しようとする姿勢を育む。</p>	<p>主体的に学問研究取り組みことにより、希望進路の専門性についての理解を深め、希望進路の実現に役立てる。</p>	<p>主体的に課題研究に取り組むことにより、他と協働しながら、自ら学び、考え、課題を解決する力を身につけさせる。</p>	
<p>探究課題</p> <p>セルフデザイン 単元Ⅰ 「地域の課題を考える」</p> <p>地域の課題について他と協働して調べ、その結果をまとめ発表する。また、その内容を共有し、課題を解決するための方策について検討し発表する。</p>	<p>セルフデザイン 単元Ⅱ 「学問探究」 ～地域の課題を踏まえて～</p> <p>地域の課題について研究した結果を踏まえ、進路講演会、大学模擬講義、本校OBやその他外部講師等による講話やインターネット等を活用し、学問等について探究し主体的に課題を設定する。</p>	<p>セルフデザイン 単元Ⅲ 「課題研究」未来への挑戦 ～地域から世界へ～</p> <p>社会の課題と自分の「探究」した内容を関連させ、グローバルな視点で調査・研究し、報告・発表する。また、他者の発表から新たな視点でこれまでの「探究」を見直し、その結果をレポートにまとめる。</p>	
<p>特別活動</p> <p>社会の一員としてより良い人間関係を築こうとする態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深める。</p>	<p>教科指導</p> <p>確かな学力や課題を探究して解決する力を身に付けるとともに、自らの考えを表現する力を身につける。</p>	<p>進路指導</p> <p>発達段階に応じた能力・適性を伸ばすとともに、自主的な進路選択ができる能力を身につける。</p>	<p>道徳教育</p> <p>生徒一人ひとりが道徳的価値観や人間としての在り方・生き方を切り拓いていこうとする実践力を高める。</p>
<p>指導方法 指導体制</p>	<p>1 学年団を中心に各分掌・教科の支援のもと、全職員で指導にあたる。 2 地域の人材や、本校OB、保護者等を外部講師として招き、指導する。</p>		
<p>評価方法</p>	<p>活動内容、レポート、プレゼンテーション、論文及び外部評価により、各単元毎に評価する。</p>		
<p>時間の位置づけ (まとめ取りの方法)</p>	<p>・毎週木曜日7校時(50分) ・調査・研究の中の一部は、長期休業期間にまとめ取りをする。 ・1学年の1月から2学年の単元の一部を、2学年の11月から3学年の単元の一部を、それぞれ前倒しで実施する。</p>		
<p>予定している学習活動</p>	<p>・講演会(地域の職業人、本校OB等)、調査・研究(地域の課題、職業、大学・学部・学科)、大学模擬講義、発表・報告会、レポート</p>		

表2 令和2年度 2学年総合的な探究の時間 年間計画

月 日	内 容	備 考
4月 9日 (木)	発表資料作成	
4月14日 (火)	発表資料作成+ワールドカフェ	
4月16日 (木)	探究活動オリエンテーション	講師：菊池氏
5月 7日 (木)	発表会リハーサル	
5月14日 (木)	「私の探究活動」発表会 (2年→1年)	
5月21日 (木)	3年発表会	
6月11日 (木)	進路参考資料説明会	進路関係行事
7月 9日 (木)	進路講演会 (外部講師)	進路関係行事
7月22日 (水)	学問研究オリエンテーション	講師：菊池氏 夏季休業
8月27日 (木)	夏休みの活動のまとめ	
9月 3日 (木)	学問研究①	
9月10日 (木)	模擬講義準備	
9月17日 (木)	大学模擬講義	進路関係行事
9月24日 (木)	大学模擬講義クラス内ワールドカフェ	
9月25日 (金)	120周年記念講演	
10月 7日 (水)	学問研究② (芸術教室の日)	
10月15日 (木)	学問研究③	
10月22日 (木)	学問研究④リハーサル	
11月 5日 (木)	学問研究⑤	
11月12日 (木)	学問研究発表会準備	
11月19日 (木)	学問研究発表会 (調べたことを授業) + 振り返り	
12月16日 (水)	課題研究オリエンテーション+計画1 (仮説)	講師：菊池氏
1月14日 (木)	「課題研究」についての計画2 (アクション)	
1月21日 (木)	「課題研究」についての計画3 (活動報告)	
1月28日 (木)	「課題研究」概要クラス発表会準備	
2月 4日 (木)	「課題研究」概要クラス発表会	
2月18日 (木)	「課題研究」概要手直し	
2月25日 (木)	振り返り (年間)・資料整理・春休み計画	
3月18日 (木)	選挙出前講座	地歴公民科担当
3月24日 (木)	合格体験発表会	進路関係行事

いを立て、机上の探究ではなく、地域でのフィールドアクションを通じて、全員がその活動について発表することは本校の探究活動の特長となっている。

エ 指導体制

学年団を中心に各分掌・各教科の支援のもと、全職員で指導にあたる。また、地域の人材や、本校OB、保護者等を外部講師として招き、多角的に指導する。

(2) 「私の探究活動発表会」

ここでは、令和2年5月14日(木)に実施された「私の探究活動発表会」の取り組みについて紹介する。

今回の発表会の目的は、2年生が昨年度取り組んだ「探究活動」についてまとめて発表し、1年生に伝えることである。対象を1・2学年とし、それぞれ質問や意見を出し合うことにより、2年生は自分の活動の意義を振り返り、1年生は今後の活動の参考として、一人一人が学びを深めることとした。2学年全生徒が発表し、時間配分は発表8分、評価・質問6分(評価3分・質問3分目安)、準備1分とし、司会は発表が終わった生徒が行った。

発表する際、はじめに発表者は「ホームルーム、氏名」を話し、それを聞いて他のメンバーは評価用紙に記入することとした。また、今回の発表では「学校で学ぶ意義・総探を行う意義」、「総探に取り組むにあたって、自分が1年間取り組んできたことをもとにアドバイス」することを含めて8分で発表することを確認した。

○総探発表会振り返り

〈生徒〉

- 文字だけではなく数値を使って資料を作りたい。
- 質問されたことに丁寧にわかりやすく答えるのが難しいと分かった。
- みんな評価は辛目。甘いより厳しい方が良いと思う。
- 理学療法士を知らない人もいたので、理学療法士の説明を加えればよかった。
- 他の発表者のいろいろな考え方を自分の発表にも取り入れたい。
- 違う視点から物事を見て新たな問題点を見つける。
- 相手の反応を見ながら発表した方が理解を深められる。
- みんなは1枚に対する情報量が多かったけど、自分は簡潔にしすぎていたのもう少し多くてもよかった。
- 数学の魅力や面白さを伝えきれていなかったのも、自分なりの教育論を考える必要があると感じた。
- 探究内容をもっと調べて質問対策をする。
- みんなと意見を共有し、総探について考えることが



図1 〈探究活動発表会の様子〉



図2 〈発表後の振り返り活動の様子〉

- できた。質の高い発表をするのは難しいが楽しい。
- 私は質問することができなかったので、1年生を見習いたい。
- 時間が余ったけど、「医療に進みたい人いる？」とかうまく繋げられて楽しかった。最初にやった発表から成長したと感じた。
- できるだけ早く相談する相手を決めて行動することが大切だと感じた。
- 質問に答えた時不十分だった所もあったので、もっと知識を増やしたい。

〈教員〉

〔運営面〕

- 教室割、教室内の配置人数、時間配分についてこれまでの改善点を踏まえながらよく工夫されており、良かった。1年生が移動せずとも複数分野の発表を聞くことができ有意義だった。

〔発表面〕

- 各生徒のテーマ設定の理由、頼った大人、参考書籍について明確に話していた生徒(2年)が多く、

単なる調べ学習ではなく根拠に基づいた探究になっていた。

- 内容のみならず総探への姿勢などを話してくれたことが、1年生にとっては大変参考になった。

〔その他〕

- 今回の発表は1年時の探究なので、上を望めばキリがないと思うが、中には「頼る大人ありき」で内容を決めた生徒もいるのかなと感じた。いかに「大人を頼り」ながらもテーマを広げられるか、が今後の課題になるかと感じた。

(3) 「学問研究発表会」

ここでは、令和2年11月19日（木）に実施された「学問研究発表会」の取り組みについて紹介する。

5月の発表会の経験を踏まえ、2年生が自分の興味のある分野の最先端について探究したことを授業という形で発表し、参観者に疑問に思ったこと等の意見を出してもらうことにより各自の学びをさらに深め、課題研究へとつなげることを目標とした。各自の持ち時間は20分（授業13分、問い出し5分、準備2分）とし、問い出し5分については、質問には答えず、なるべく多くのアドバイスを受け、振り返りにあたっての自己の授業内容が深められるような時間とした。また県内高校の先生方、弘前市内大学の先生方及び学生の方々（合計30名程度）に参観していただきアドバイス、意見をいただいた。

表3 発表テーマと要旨（抜粋）

発表場所	班	順番	PC	KP	黒板	分野	テーマ	要 旨
21HR	33	⑤		1		看護学	これからのNICU	NICUの現状や最新のケア方法、また、NICUをより良い場所にするために何をすべきか考えました。
21HR	33	④		1		リハビリテーション学	PNFについて	理学療法で使われる「PNF」という運動療法について、運動のパフォーマンスの向上や傷害予防などとの関係性、また、脳との関係についてまとめた。
22HR	15	⑤		1		コミュニケーション学	本当のコミュニケーションとは	医療現場において、医療従事者が患者に対するコミュニケーションの仕方と、その効果について。
セミ34	12	⑤		1		教育学	学校のダンス授業何のため？	私たちがやっているダンス授業は何故やらないといけないのか、自分たちのどのような事に繋がっているのかを考える。
体育館	43	⑤		1		獣医・畜産学	猫の目の色について	成長につれて変化する猫の目についてまとめてみました。
体育館	30	⑤		1		健康科学	リハビリでの作業療法士の役割	リハビリで作業療法士は患者さんどのように関わっているのかを調べ、実際に患者さんの声も聞きまとめました
体育館	27	⑤		1		リハビリテーション学	発達障害と作業療法	発達障害がもつ子供たちに作業療法士ができること、教育の面から作業療法士にできることを調べました。
体育館	32	⑤		1		看護学	医療的ケア児の訪問看護の課題	最近増加してきている医療的ケア児とそれに伴って増えてきている訪問看護などの課題や問題について調べました。
体育館	31	⑤		1		看護学	子供の貧困	子供の貧困について、日本と海外を比べながら調べ、今の私にできることについて考えた。
26HR	19	⑤		1		機械工学	AIの歴史と未来	これまでのAIの歴史を元に、これからの未来ではどのようにAIが使用されるのかについて。
23HR	16	⑤		1		生物学	小鳥の発声学習を支えるもの	話すという行為がどのような仕組みで行われているのか、発声学習能力を保有する小鳥の脳の機能について交えながら説明。また、研究の活用法の案など
26HR	19	④		1		人間科学	化粧心理学	化粧が人の心や体にもたらすものについて探究しました。
セミ34	4	⑤			1	教育学	アクティブラーニングについて	「主体的・対話的で深い学び」とは何かを説明し、自分なりの「評価基準の作成」を行う。
体育館	30	④		1		看護学	自傷行為の向き合い方	自傷行為にマイナスな印象を持つ人も多いと思います。しかし自傷をしてしまう人には周りからの手助けが必要なのではないでしょうか。
体育館	38	⑤		1		化学	美容貯金	化学の視点から、日焼け止めの構造や性質を探究。主に酸化チタン、親油基を使った処方についてなど。
被服室	29	⑤		1		看護学	妊婦と病気	妊婦が様々な病気にかかった場合の妊婦と通常の人との治療法の違いなど
23HR	45	④		1		栄養・食物学	ヴィーガンと環境変化	ヴィーガンと自然環境の関係性や、地球温暖化防止に向けてどうすべきか、ヴィーガンの紹介を交えて考える。
22HR	40	⑤		1		医学	産後うつ病とは？	将来誰が患ってもおかしくない病、産後うつ病について調べました。
22HR	2	②	1			保健・衛生学	生き物の半分近くは寄生虫！？	生態系の多くを占める寄生虫の危険性、奇怪な能力などの興味深い実例をもとに寄生虫をまとめました。
体育館	48	④		1		医療技術学	放射線の利用と影響	放射線について、また放射線が人体にどのような影響を与え、どのように活用されているかを説明します。
セミ12	3	③	1			看護学	救急医療の問題	近年、救急車や救急医療の利用件数が増えている。救急救命についてまとめます。



図3 〈学問探究発表会の様子（授業スタイル）〉



図4 〈発表授業後の問い出しの様子〉

○学問探究発表会反省

参観者について（回答者）

教育関係者（高・大学等）9名 大学生16名

①授業を見ての感想や気づいた点

〈教育関係者〉

- 発表の始まりの際のアプローチの仕方発表方法も様々で、生徒の個性が見られました。聞き手の「問い出し」は今後の本人の学習につながるよい手段だと感じました。
- 発表方法が多様で非常に楽しませていただきました。セリフを考えてくる生徒もいれば、そうでない生徒もいて、きっと各自で自分に合った発表方法を見つけたのだなと思っています。
- 生徒がよく調べていると感じた。目的（自分の知りたいこと）が明確だからなのでしょう。発表も工夫が見られた。質問・解答ではなく「問い出し」を問う考え方は新鮮に感じた。
- 班分けは同じジャンルの方が教育効果は高いと思われました。異なるジャンルのため関心のない話を聞かされたらどうしていいかわからない様子の生徒もおりました。

- 高校生にとって「問い出し」が難しい。はじめて聞く中身、はじめてのメンバーで内容・方法の共有はできるのだろうか。
- 皆さんデータをしっかり調べていて、分析されているのがよく伝わりました。自分の意見をもっと盛り込んだらいいのではないかなと思いました。
- 問い出しがうまくいっていないと感じた。初めて会った者同士、個別に一人一人違うテーマでグループとなり、どこでチームが生まれるか。チーム意識が醸成できない。学際の意味合いもわかるが、近接領域で共有できるものがあると、交流の深さや思い入れも違って来る。研究方法を共有するなど大事なこともある。個別とグループは矛盾しない。誰に関わることを誰に報告するのかということ。
- 「授業」という形式についてだが、後でそう言われると、授業っぽいなと思ったり、つながった。「授業」とは面白い取り組みだと感じた。双方向性を感じた。緊張して「伝えられた」、「伝えられなかった」というのに差があったようだ。
- 弘前中央高校の授業形式の取り組みは独立性が特徴的であり、自分だけで調べていると一つの見方になってしまうことがある。個別テーマ、近接グループという班構成で、「集団の力」を生かしたほうがよい。

〈大学生〉

- 一人一人が自分の意見考えをしっかりと持っていることはすごいと感じた。説明の中に抽象的な表現があるのでその部分を具体化していくとより良くなると感じた。
- 生徒間で活発に問い出しがされている。難しい研究を自らの言葉に直して話しているため分かりやすく、生徒も積極的に聞きリアクションしていた。目のつけどころもすごくおもしろい。
- 論文を引用したり、自分で検証したりと、探究に対して積極的に取り組む生徒が多いように感じました。
- 誰もがきちんと調べていて、好感を持った。だからこそ問い出しのハードルが高くなったと思う。既に興味関心は大学生かそれ以上に広がってとても有意義な学びになったのではないかな。

②「ふりかえり」活動について

〈教育関係者〉

- 生徒が書く量の多さ、スピードに驚きました。発表の点数をみていると、ほとんどの生徒が50点以上、70～80点の生徒も多くいました。生徒自信の評価は、満足度を示しているのではないかなと思いました。情報収集を充分に行った結果なのではないかなと思いま

した。

- グループで共有したり、個人で深めたり、短時間だが効果的にすすめる手法がすばらしい。次の活動へつなげる視点で話しておられた。大事なことだと思った。
- 大変良い活動でした。2週間前にも来校されたようですが、一度の活動で終わりではなく継続することが大切だと思いますので、生徒の変容を見取ってほしいと思います。
- 生徒たちの多くは「発表のしかた」に焦点をあてていたが、この発表を作っていくプロセスでの学びが焦点ではなかったか。
- 自分のことを相手の質問や意見を照らし合わせて振り返ることができていた。

〈学生〉

- 一つ一つ丁寧に自分を見つめる時間がしっかり設定されており一人一人が実行できていたのでよかった。
- 自分の伝え方の反省や、さらに調べたいことについて、活発に書いていたように思う。前回との点数を比べられるのは面白いと思った。「授業とは」や「自ら学ぶことについて」という難しいテーマを自分の経験を生かしてかけているなど感じた。
- 想像しているよりも、高校生自身が今後どうしていきたいかについて考え、そして自ら学ぶその本質について各自言葉でまとめられていることにとても驚きました。たった2週間ほどでもおそらくとんでもない程の成長があったように感じました。
- これまでの探究の振り返りと論文に向けての課題をはじめとするこれからの見通しを立てている生徒が多くいたと感じた。
- 自分の次の課題を見つけるための良い時間になっていたと感じた。

○総発表会振り返り

〈生徒〉

- 今までで一番授業らしい発表ができた。大学生の方がたくさん問い出しをしていて自分も見習いたいと思った。
- リハーサルよりも内容を高めて時間いっぱい話すことができた。学術度を高めることができた。
- 自分が頑張って調べたことを思う存分発表できて楽しかった。授業とはどうしたら相手に理解してもらえるか考えながら話すことだと実感した。
- 学術度が前回より上がったが、伝わりにくくなった気がする。発表してこれから確認したいことや加えたいことがはっきりした。マニアックな研究を取り

入れたい。

- 自分の発表だけを聞けば矛盾点はないが、広い視野を持ってみると説明がつかないことがたくさんあるので、それらも裏付けられる根拠を見つけたい。
- 大学生からも意見がもらえた。誰も興味がないと思って省略せずに説明を付け足す。図やイラストをもっと使って分かりやすくする。
- 弘前の元々ある魅力も視野に入れるべきだった。仮説を検証する準備をする。
- この総探の活動を通して自ら学ぶことは何か、授業とは何かを自分で見つけることができた。
- 経済学だけではなくデザインについても深めなければならなかったと思った。
- 今回の発表は今までの発表の中で一番良い発表だったと思う。しかし質疑応答で指摘された部分があったので、次の論文作成に生かしていきたいと思う。
- 自分の発表は出典がまだまだ不足しているので、これからは最新の研究を取り入れていきたい。

〈教員〉

- 1年生の時から、KP法によりプレゼンテーションする機会を数回設けており、この形での発表には生徒たちは慣れてきている。また、生徒同士の振り返りというサイクルを作り上げている。話すことはできてきている。しかし、調べたことをただ発表するだけでは発展していかないので、今年度は学年で話し合い、「授業する」という形式を取ることにした。10月22日にリハーサルの中間発表を実施したが、プレゼンの域を出ていないことを確認し、「根拠」を持ち、人にワークショップしてもらうことの重要性を認識させ、後半3時間で深めて今日に臨んだ。
- ホームルームに担任と副担任が行き、生徒を半分ずつ担当し、答えを教えるのではなく、「何が最新の既知なの？」などと質問したり、進捗状況を確認したり、自分が知らないことを知るだけで満足してしまう傾向があるため、「そもそも何を究めたいのか」、より専門的にマニアックに、研究テーマを狭く絞る助言ができた。
- グループ分け5人、4人で、近似の分野、文系理系を同じ分野の生徒に引っ張られないように、あえて混ぜた。生徒達はバラバラにすることには慣れている。今回は同じカテゴリーの人同士共有する場面設定はなかった。最初から近似のグループで編成されると小さくまとまってしまう恐れもある。今後はリハーサルが近似グループで、本番が混成などもあるかもしれない。
- 生徒も頑張り、担任や副担任が前向きに頑張ってく

れたことが大きいように思う。学年会議でもあり方について議論してきた。担任、副担任がお客様にならないで、生徒達と関わり、自分事として意見を交換してきた成果が出ているよう感じる。

3 考察

(1) 取り組みについて

「ア 総合的な探究の時間の目標」では、地域に対する理解を深め、地域の課題を発見し、その方策を講じようとする中で、自己そのものについて深く考えをめぐらすものとなっている。また学びのプロセスの中で他者と協働し、互いの考えを理解しあい認め合いながら課題解決の方策を見出すことは、より共感的な人間関係の育成につながるものである。学問・職業研究については、志望進路も含めて多面的に考察することで職業観や勤労観の醸成を図るもので、自己決定や自己開発を援助するものとなっている。

「イ 育てようとする資質や能力及び態度」では、生徒に自己存在感を与えることについては、3 実行力、4 発信力、8 自己管理能力が、共感的な人間関係を育成することについては、5 協働力、7 傾聴力が、自己決定の場を与え自己の開発の援助することについては、1 発見力、2 探究力、6 創造力が対応しており、どのような力を育成したいかが具体的にわかる形で示され、3つの機能が踏まえられている。

「ウ 内容」では、地域の課題を主体的に設定していることや、生徒一人一人が自ら問い立てをしていることから、自己存在感や自己決定の場を与えるものとなっている。一方で、全員がその活動について発表することから、活動自体が個別的であり、発表までのプロセスでは共感的な人間関係の育成については希薄である。

「エ 指導体制」では、教員間の指導に違いや学年間の意識に温度差が無いように、学年・分掌横断的な体制のもと、相互理解に努めている。学校外の人材からの助言等から主体的な交流を促し、コミュニケーション能力の向上を図っている。

(2) 発表会について

5月の発表会は、1年間の探究活動の成果を2年生全員が1年生に発表することで活動の意義を振り返り、自分を深く見つめ直す契機となっている。今回の発表は「学校で学ぶ意義・総探を行う意義」、「総探に取り組むにあたって、自分が1年間取り組んできたことをもとにアドバイス」することを念頭に置いている。入学間もない1年生に発表するということが、中途半端な発表はできないという強いモチベーションにつな

がり、下級生への発表場面を作るという取り組みは大いに意義があったものと考えられる。生徒の振り返りも「みんなと意見を共有し、総探について考えることができた。質の高い発表をするのは難しいが楽しい」等があり、発表場面において自己存在感を高めることができている。また、個別の全員発表は自分が発表者であると同時に他者の意見を聴く側にも回ることから、自分の発表と比較する場面が生まれ、自分の研究の成果を意識することになる。このことは生徒の振り返り「違う視点から物事を見て新たな問題点を見つける」「相手の反応を見ながら発表した方が理解を深められる」等にも窺える。これは次回の発表において何を改善し、どこまで探究すべきかの方向性を決定させる要因になっている。教員の振り返り「各生徒のテーマ設定の理由、頼った大人、参考書籍について明確に話していた生徒(2年)が多く、単なる調べ学習ではなく根拠に基づいた探究になっていた」から、多くの生徒が、自己のテーマを決める時に、自己決定をしている様子が窺える。一方で「中には『頼る大人ありき』で内容を決めた生徒もいるのかなと感じた」から中にはテーマを決める時に自己決定できていない生徒もいることが想定され、十分な自己決定の場を与えていない状況も考えられる。テーマ設定については、研究を進めていく上で根幹をなす部分であるので、適切に自己決定の場を与えるような指導をしていく必要がある。

また、指導する教員の共通理解については、教員の振り返りの肯定的な意見からもおおむね共通理解がなされていると思われるが、これは主に1年次からの持ち上がりの教員で学年を形成し、継続的に指導していることも理由の1つである。

11月の発表会は「授業」という形式をとることで、相手に理解してもらうこと、そのための創意工夫をすることを強く意識して取り組んだものである。生徒は自分が知らないことを知るだけで満足してしまう傾向があるため、教員の振り返りにもあるが「何が最新の既知か」「そもそも何を究めたいのか」等、教員が生徒個々の進捗状況により適切に指導・助言することで、探究内容が段階的、系統的、発展的深化につながるものとなった。このことで教員もまた、授業の形態をとることで教員間の話し合いの場を増やし、指導に齟齬が無いように共通理解を深めていったことが窺える。だが振り返り活動において、違う系統の生徒同士でグループを構成したため、問い出しも深まらず活発な意見交換に至らなかった。これは教育関係者の「問いだしがうまくいっていないと感じた。初めて会った

者同士、個別に一人一人違うテーマでグループとなり、どこでチームが生まれるか。チーム意識が醸成できない」「班分けは同じジャンルの方が教育効果は高いと思われました。異なるジャンルのため関心のない話を聞かされたらどうしていいかわからない様子の生徒もありました」等の指摘にもあったが、同系統或いは近接テーマのグループで構成し、協議した方が集団の力が生かされ、競争性も生まれたものと思われる。この点においては、十分な共感的な人間関係を構築できたとは言えなかった。一方「生徒間で活発に問い出しがされている。難しい研究を自らの言葉に直して話しているため分かりやすく、生徒も積極的に聞きリアクションしていた。目のつけどころもすごくおもしろい」という大学生の感想もあり、今後も工夫してこのような取り組みを生かしていけば、共感的な人間関係の構築につながったり、自己存在感を高めたりしていくものと思われる。ただ、5月の発表と比較しても生徒の成長が目に見えてわかり、この発表を振り返ることで生徒たちは自己の課題を明確に意識することになり、それが3年生での論文発表への強い意欲につながっている。これは総合的な探究の時間の活動が起点となっており、生徒たちがそれぞれの学校生活全体の学びの意義を考えることで、進路選択も含めた自分の生き方について継続して深く考えてゆくものである。このことからこのたびの発表会は、生徒に自己決定の場を与え、自己の開発の可能性の開発の援助につながっていると考えられる。

4 おわりに

本校の総合的な探究の時間の取り組みは、考察にもあるように教育機能としての生徒指導の視点を踏まえたものになっており、学びの過程でどこまで目標に到達できたかについて、生徒及び教員はその都度リフレクションし、評価し、客観的にその到達度を確認している。「研究」という視点で学問的に自分の興味関心を深めることは、自己の人間形成に大きく関わっていくことであり、その成果は生きていく過程で徐々に現れてくる。この観点からすると探究における生徒の取り組みは、いかにわかりやすく伝えているか、については探究の構成、エビデンスの提示、KP法であれば発表資料のレイアウト等、発表力は向上しており自己の可能性の開発の場とはなっているが、発表内容を通してどのように現在の自分を周囲に理解してもらうか、といった自己表現力についてはまだまだ乏しいと思われる。

また、共感的な人間関係の育成について十分ではな

いという課題が浮き彫りになった。発表の際の問い出しの場面や振り返り活動など、協働的に活動する場面は設けられてはいるものの、お互いの研究課題や考え方を十分に深めるまでには至らなかった。これは表1の全体計画に示されているように、元々、生徒の実態として「規範意識は高いが、人間関係の構築力が弱い」という課題が挙げられており、加えて総合的な探究の時間が個々の活動を基軸として実施していることにも起因する。ただ、総合的な探究の時間において近年研究の場では、グループで共同して研究を行うことが多くなっている。このような実態を鑑みると、本校での取り組みも個人研究を基軸にしつつも、次のステップである論文執筆などの場面においてはグループ研究を取り入れる等の手立てを講ずることも必要で、それが共感的な人間関係、協働的な学びにつながっていくと考えられる。

教員の指導の共通理解については、教員の振り返り「生徒も頑張り、担任や副担任が前向きに頑張ってくれたことが大きいように思う。学年会議でもあり方について議論してきた」等にもあるように年間を通して計画的に指導を重ねており、共通理解を持つことができたと言える。課題としては振り返り「今回は同じカテゴリーの同士共有する場面設定はなかった」「今後はリハーサルが近似グループで、本番が混成などもあるかもしれない」等、生徒の実情とうまくかみ合っていないような指導場面も見られたことである。今後は実施計画の段階において、生徒の実態を踏まえたグループ構成やアプローチの方策を考え、生徒に示していかなければならない。

以上、本校の今後の生徒指導の在り方として、生徒個々の主体的な学びの活動の支援を教育課程の全領域で実施していくとともに、協働的な学びの場を構築し、生徒の人間形成を促すためにはどうすべきかの検討・工夫が必要である。

【謝辞】

本論文執筆にあたっては、論文の構成や論旨の展開、参考文献の紹介等について、吉原寛氏（弘前大学大学院教育学研究科准教授）から助言を得た。この場を借りて深く感謝申し上げる。

参考・引用文献

- ・文部科学省（2018）. 高等学校学習指導要領解説総則編 東洋館出版社
- ・文部科学省（2011）. 生徒指導提要 教育図書